

会 議 録

会 議 録			
名 称	都留市文化財保存活用地域計画策定協議会	回数	第 2 回
日 時	令和 8 年 8 月 26 日（水）13 時 30 分～15 時 00 分		
場 所	ミュージアム都留研修室		
出 席 者	【委員】小林会長、石井委員、植田委員、唐澤委員、菊地委員、佐藤委員、清水委員、 田開委員、本田委員、高野委員（宮里委員代理）、御山委員、森屋委員 【委員（庁内）】鈴木（美）委員、佐藤委員、三澤委員、高部委員、竹谷委員、 河野委員 【事務局】教育長大竹、生涯学習課長程原、生涯学習課長補佐中村、 文化振興担当リダ-知念、文化振興担当下田、文化振興担当小島、 文化振興担当三浦		
欠 席 者	【委員】稲垣委員、上村委員 【委員（庁内）】鈴木（弘）委員、島尻委員		
議事内容	次のとおり		
1. 開会（司会進行：生涯学習課長補佐中村）			
2. 副会長の選任 森屋雅幸委員を副会長に選任。			
3. 議事（事務局）			
ア 資料 1 「地域計画の内容（現時点）について」、資料 2 「第 3 章「歴史文化の特性」の考え方に ついて」について、関連性があるためまとめて事務局より説明。			
【委員からの意見】			
小林議長 説明のボリュームがあるため、委員の皆様方からもなかなか理解しにくい部分もあつたかと思うが、私なりに整理させていただいた。前回各委員から非常に活発なご意見をいただき、それが今後の計画の進め方の 1 つの柱になってくる。5、6 点挙げると、歴史と文化を 1 つのキーワードとして進めること、担い手人材不足の中での確保・養成、教育の場で子供たちに歴史文化をどう伝えるか、都留市の魅力を観光面にどう結びつけるかといったことである。また、高齢者の居場所づくりでの学習の活用、幼少期から文化に触れさせる学習、さらに市民から直接声を聞く公聴会の場を設けることなど、具体的なお提案をいただいた。ただいま事務局からも説明があったが、会議資料 2 のキャッチフレーズ、キャッチコピーについてお尋ねがあった。これについて委員の皆様から文言についての意見や、さらにこういう文言をつけたらどうかといったご意見を伺いたいと事務局からあったので、皆様にお諮りしてご意見を伺う。その前に、前回に引き続き観光面についてもご提案をいただいている。C-table の「つるの			

ルーツ」などで都留市の歴史や文化を発信していらっしゃる本田委員に、観光面についていろいろとお話を伺っており、幅広い見識をお持ちだと思うので、ご意見などがあればお聞かせいただきたい。

本田委員 「つるのルーツ」というプロジェクトをご存じの方いらっしゃるか。ご存じない方へ説明すると、2023 年から観光戦略の中でシビックプライドを醸成していこうと企画し立ち上げたプロジェクトになる。市民アンケートで 30 代を中心に城下町への愛着や関心が薄れていくタイミングだということで、若い方を中心にもうちょっと城下町に興味を持ってもらうため主に 30 代 40 代の主婦層を想定し、ポイントを獲得して利用するポイ活的なものに関心があるのではないかと考えて LINE 公式アカウントを作り、歴史のコンテンツを配信する仕組みを作った。記事を読んでもらったりクイズに回答してもらうことでポイントを貯めてもらい、貯めたポイントを市内の事業者で使える仕組みであり、現在、運用して 3 年経過し、会員は約 3,000 人いる。今もクイズの回答者の 30%、約 1,000 人の方が毎回回答している。「つる観光戦略」は城下町をフォーカスした戦略になっているが、この後、令和 9 年から新しい観光戦略になっていく。新しい観光戦略では、「つるのルーツ」のプロジェクトを城下町という発信ではないものの、先ほど事務局から説明のあった「歴史文化の特性」というところが、結果的に城下町という切り口では山中湖や河口湖、富士吉田といった明確な観光シーンがあるところと都留は少し異なるため、集客のポイントとして集客できないという課題がある。そうした中で、都留市自体も観光客がいたずらに増えることを望んでいないのではないかとという仮説があり、今回の観光戦略では都留の資源を気に入ってくれた方が何回も来訪してくださって、観光・関係人口を増やしていく流れがいいのではないかと策定途中の議論になっている。第 3 章で定義した「歴史文化の特性」が今後の観光戦略にすごくフィットすると思っており、分かりやすい観光資源ではないものの、市民や市外の方、「つるのルーツ」のユーザーにアンケートをとると、穏やかな暮らしや常に住んでいる方に魅力を感じている人が多い。こういった都留の日常というか、当たり前の日常だが市内の方から見たら当たり前でないところをさらに PR して、尖った観光資源がない中でも都留市の特徴を好んで関わってもらう、市民の方も改めて自分の歴史文化を知る機会を自然と取り入れる仕組みを作ればいいのではないかと考えた。

小林議長 事務局いかがか。

事務局 従前、本田委員と会話させていただく中でも、観光戦略の位置付けとして城下町だけのアプローチだと難しいという話をしながら、我々も歴史文化の特性を設定する上で城下町だけではなく広域的にいろんなエリアで考えていく必要があるというところ

があった。今回計画に設定させていただく内容についてもすり合わせをさせていただきながら進めさせていただければと思っている。

小林議長 私も「つるのルーツ」の中でクイズは大変楽しみにしており、毎回ちゃんと答えている。もっと難易度を上げていただければと思う。

それでは本題に移ると、事務局が提示する３点（水、みち、学び）についてのそれぞれのキャッチフレーズについて、委員の皆様方からこういうふうにつけたらいいのではないかと、都留市をもっと PR するにはこういうわかりやすい文言を入れたほうがいいのではないかとといったいろいろな発想があるかなど、ご意見を伺いたい。特にこちらから指名はしないので、挙手をいただきご意見を伺いたい。

菊地委員 ご説明いただいた内容については異論はないが、歴史文化の特性の２つ目の「みちがつなぐ産業と文化」について、道が何をつなぐのかがこの表現だと少しわからない。モノではなくて場所と場所をつないでいるということが一番の論点だと思うので、「都市と〇〇」など、もう少し具体化することによって、「みちがつなぐ産業と文化」の意味がより明確に伝わるものと感じた。これは文言レベルの話だと思う。

加えて、１番２番のキャッチコピーについて、なぜこのフレーズが出てきたのかがわかりづらい気がする。「歴史文化の特性」というより、よくよく考えると第１章の各背景の説明がわかりづらく、基本的な情報が不足している。特に市外にいる人から見るとよくわからない部分があると思う。例えば河岸段丘の説明についても、今の第１章だと図１-３や図１-４で地形区分や地質は出ているが、どこが河岸段丘になっているのか、図をしっかりと捉えないとわかりづらい。仮に起伏や川を分かりやすく表現した図が挿入されていれば、見ている側も河岸段丘の広がりをつまみやすくなる。そういう情報が水系・湧水の話にしても、道の話にしても、きちんと記載されていると、地形があり道がこう走っているんだとわかって、結果的に「歴史文化の特性」の１、２、３以降に記載する概要についても理解が深まると思う。第１章の書きぶりにもう少し基本情報を加えていただくとよい。

その上で「みち」については、甲斐絹がどうすごかったのか、取扱量が多かったといった内容を入れていくとよいと思う。第１章をシンプルに書きすぎないというのは確かに重要だが、一方で押さえるべきところはしっかり盛り込んだほうがいい。グラフなどを入れて流通量が多かったという話が出てくるとよりわかりやすくなる。

もう１点、関連して第１章の自然的・地理的環境の（２）で地区区分・地名の記述があるが、これも市内にお住まいの方なら何とか地区と言えはわかるだろうが、市外・県外の人を読むとどこにあるかわからない気がする。市内の地区区分についてもここで触れていただくと後ろの内容ともリンクしてわかりやすくなる。

小林議長 事務局の方から願います。

事務局 ご指摘のとおり基本情報のところを必要な項目だけに注力している部分があるので、「歴史文化の特性」の裏付けがしっかりできるような形で記載する。今お話いただいた甲斐絹の売れ行きや移動量などのグラフは、「歴史的背景」に入れるようなイメージか、それとも「社会的状況」の「産業」の部分というイメージか。

菊地委員 相互に関わってくる部分でもあるので、今に繋がっている話は「社会的状況」の方に絡めて説明したほうがよいと思うし、過去の事実に関しては「歴史的背景」の方に振り分けるところで工夫していただくのがよいと思う。

事務局 1章の「歴史的背景」と「社会的状況」も関連性がある部分は結びつくような書き方にするのがよろしいか。

菊地委員 然り。「歴史文化の特性」に当てはまるものは自然、社会、歴史など全部に係る部分だと思う。今、その繋がりところが綺麗におさまってしまっていて、するすると読み飛ばしてしまう感があるので、「特性」に当てはまるものは少し意識して、それぞれのつながりが第三者が読んでもわかりやすくなるように検討いただくとよい。

小林議長 具体的なご提案をありがとうございます。ほかにもあると思うが、いかがか。

田開委員 「特性」の3つの柱は水からはじまり道、学びへと継承・つなげていくというところで、私もすごくいいなと思った。細かいところでいうと、1つ目の「水系を形成した」という内容がイメージがわきにくいというか、目に見える景観に終始してしまうようなきらいがあって、自然、水といった自然の資源から何が生み出されてきたのかということ、この3行の概要をもとに少し深掘りしていく必要があると思う。

その点について、織物産業は、水を取り巻く都留市の主要な産業の一つであり、そこから様々な景観や人の暮らしや信仰といったことが結ばれてきたということがあるので、第2章の文化財調査の内容についても、そういった観点から深掘りする必要があると思う。

例えばご参考までに、今、十日市場でかつて絹織物を営まれていた方とお話をする機会があって、小正月に道祖神の祭りのときにのぼり旗を立てて、そこに絹で編んだ飾りを付けていたとか、どんと焼きをやってお餅を繭玉に模して作っていたとか、そういった人の記憶からも結節点は非常によく見えるなと感じたので、「1. 水」のところでもそういったことがしっかりと触れられるといいと思う。「2. みち」も同様に、ただ単に製品が運ばれて流通があったという記載にとどまらないことが望ましい。

また、3つ目の学びの継承において、などと書かれているので学校教育史だけに終始はしてないと思うが、より幅広く「学び・教育」を捉えたほうが良いと思う。例えば織物産業であれば、様々な紋様を織り出すために多種多様な紋紙が用いられてきたことや、それを扱う職人の技術が継承されてきたことも重要である。特に、言葉や文書だけでは伝えることのできない、身体感覚や経験に基づく暗黙知のようなものが、職人同士の関係のなかでどのように受け継がれてきたのかという視点も含めると、「学び・継承」の内容に厚みが出ると思う。

追加して言うと、幼少期からの学びということであれば、都留市では歴史的に寺院を母体とした託児保育が行われてきた経緯があり、それが現在の長生保育園や開地保育園などの運営にもつながっている。文化財としての寺院を建物や信仰の側面だけから捉えるのではなく、地域の子どもの育て、学びを支えてきた場として捉える視点も、「学び・継承」のなかで明記してよいのではないかなと思う。

事務局 ご指摘のとおり、景観の部分というか基本情報をかなりポイント的に載せている部分もあるので、何が生み出されてきたのかや、人の繋がりの部分に関与するようなところもある程度ボリュームアップさせていただければと思っている。学びについてはなど書きでコンパクトであるため、職人の継承や幼少期の教育の部分についても触れさせていただければと思う。また、3行でまとめている概要とあわせて、その下に説明書きを何行か付け足すような形で構成は考えているため、不足内容や追記内容についても補完できるように整理できればと思う。

御山委員 3章の「歴史文化の特性」について繋がりを意識してという部分については、特段異論はない。ただ、ここに書いてあるつながりが都留市の歴史文化を醸成してきたというのはわかるが、この繋がってきたプロセスというのは、あくまで都留市の地域を醸成したプロセスなわけであり、様々な水系や道といった形成されたものが繋がった結果、「生まれてきた都留市特有のアイデンティティや個性」を概要に記載しないと、都留市の地域計画の「概要」として説明できていないのではないかなと思った。先ほど田開委員がおっしゃられた絹織物の話とかそういった個性をもっと押し出して、包括的に都留市の全体の「歴史文化の特性」をアピールできるというものをここに記載すべきではないかなと思った。

事務局 ご指摘のとおり、具体的に繋がった結果何が生まれてきたかということも含めて、キャッチコピーとあわせてこの概要もキャッチコピーを裏付ける要素とし、さらにはそれをもとに市内外にPRを図っていくという点を考慮した上で反映できればと思う。

小林議長 森屋委員はいかがか。具体的な提案があると思うが。

森屋委員 繋がるというキーワードについては私も異論がなく、ステークホルダーの気持ちや活動と文化財をつなげるとか、文化財に興味関心を持ってもらうことは非常に重要なキーワードじゃないかなと思っている。

他の委員からも意見として出ているが、地名を切り口にしてそこから都留の歴史文化の特性が繋がりをあることを提示しているわけだが、やはり 1 章の「歴史的背景」とリンクしづらいと感じる。内容を書きすぎないようにという注文があるということで字数制限がある中で厳しいかと思うが、「背景」は繋がりに寄せて書いていただくのがよいと思う。都留市固有の繋がりというものを調べていけば結構出てくると思うので、そういうものを盛り込んでいただくといいと思う。

ただ、リンクさせるがあまり、地名の説をいくつかある中でこれを採用しているわけで、これイコール都留市の地名として限定的な要素が独り歩きするのは怖いところがある。あくまでいろいろある説のうちのひとつであることを、この計画書の中では記載しておいたほうがいいかなと思う。

また、「歴史的背景」のところを読んでいて、断定的な表現をなさっている部分が多々見受けられるので、特に勝山城のところは中世に小山田氏によって築城され、近世に継続して使われたということが断定的に書かれているので、慎重に扱ったほうがいい。あわせて、細かく見ていくと、谷村大火が昭和 14 年と書いてあるが実際は昭和 24 年なので、誤記に気をつけて書いていただくとよい。

事務局 ご指摘いただいた通り、「歴史的背景」の部分の断定的な表現などは気をつけながら進めたい。こういった学術的な部分と歴史背景の部分につきましては、ぜひまた森屋委員と突き合わせをさせていただきながら、ご教示いただければと思っている。

植田委員 3 点申し上げる。1 つ目は、キャッチフレーズに関してはとやかく言う立場でもないなと思いながら発言させていただくが、全体の考え方として、資料 2 のスライド 2 でお示しいただいている「実施していくべき措置」から、第 7 章・第 6 章の部分でキーワードとして出てきている「つる」の名前につなげている説明の仕方には、やや性急な印象を受ける。実際、6 章 7 章で書かれていく予定の 4 類型にどう繋がっていくのかというところについて、今の時点では逆側の矢印の向きで考えていらっしゃるような印象を受けた。本来、行ったり来たりしながら作業が進むものだと思う。

そのため、今後、検討を深め、実施していくべき内容や取り組んでいく具体的な内容が明らかになってきた段階で、キャッチコピーや概要を再考していくことなどの判断がより正確になってくるのではないかなと思う。

2 点目は、会議資料 2 における文化財関心度のペルソナについては、もうひとひねり

していただくのがいいなと思っている。実際、とことん学び伝えたい人と機会があれば知りたい人のギャップはかなり大きいものがある。無関心層に寄っているようなペルソナが設定されているかなというような印象がある。

医療や健康の関係の分野で見たときに、「行動変容ステージモデル」という考え方があり、無関心期・関心期・準備期・実行期・維持期へというような段階の考え方がある。そういった要素も取り入れつつ、ステークホルダー間のギャップを埋めていくような形を想定しておく、具体的に何をやるのかというところが見えやすくなってくると感じた。

3 点目は、スライド 6 に書かれている「文化財を未来につなげる」「暮らしにつなげる」「誰もが繋がる」「地域が繋がる」というところ、これは並列的に書かれているが、考え方としては並列にはしきれない部分もあるのかなと感じた。例えば、「文化財を未来につなげる」というのは時間軸の話と思うし、残りの 3 つに関しては空間軸における話と思う。このあたりは、並列的にするのか、少しずつしながらやっていくのか整理していただくと、実行すべき内容の時間軸の見方もできてくるのかなと思った。

事務局 お見込みのとおり我々もこの考え方を整理する上で行ったり来たりしながら整理しており、整合性が難しい部分があるなというのは実感として持っていた。6 章 7 章を具体的に整理していく中で改めてご提示できればと思っている。行動変容ステージについても、植田委員にご教示いただきながら進めさせていただければと思う。空間的な部分につきましても、改めて委員の皆様にご提示できるような形に整理できればと思う。

植田委員 今の部分で、1 点目にお話したところに関してだが、どこまで厳密にリンクさせていけばいいのか、どのように考えていくのがよろしいか。

事務局 このキャッチコピーのところについては、具体的な事業を展開する上で、ある程度ブレのないような形で設定をしたいなとは思っている。総合計画のテーマ等でも安心と繋がりや親和性があるため、少しこじつけになるかもしれないが、ストーリーに沿って事業展開できているなというところを「見える化」させていきたい。常にこのキャッチコピーに毎回立ち返りながら事業展開できているかというところで、柔軟性を持ちつつ進められればと思う。

植田委員 その辺はバッファを取っておけるような形にしておくことが望ましいと思う。

小林議長 起業的な目線で石井委員はいかがか。

石井委員 歴史特性をまとめてキャッチコピーを作っていらっしゃるということで、方向性としてはいろんな考え方があって良いと思う。

ただ1つ、私が見る限りは、どちらかという和外向きの立場にいて、歴史の特性もすべて内向きというようなイメージになってしまっており、どうやって外の方に文化財を活用していただいて都留市に来ていただくかというようなスローガンのようなものももう少し見えたほうが良いなと思った。

今後これを取り組んでいく中では、もう少し外からの方にどうやってこの文化財をアピールしていくかというエッセンスを入れていただければと思っている。

事務局 行政内部で考えていくとどうしても内向きになってしまうところがあるため、おっしゃる通りで、歴史文化の特性というとそのうちの要素が結びついてしまうところがあるため、具体的な将来像を提示していく中で、観光戦略等の視点も踏まえて考えていきたいと思う。

小林議長 教育的な要素で清水委員はいかがか。

清水委員 今回のキャッチフレーズの構成は非常に良いと感じている。特に「水・みち・学び」という順番において、水からはじまり道につながり、最終的に学びへと展開していくという流れが非常に優れていると思う。小学校や中学校における総合的な学習の時間で地域についての探求活動を行う際、児童生徒がまず最初に取り上げるのは決まって「水」である。水を調べ、実際に触れ、水遊びなどを通貨して「水から何が生み出せるのか」を考えること自体が、発想の原点となっている。キャッチフレーズの真っ先に「水」が配置されていることは教育現場の実感としても非常に納得がいくものである。

その観点から言うと、ステークホルダーのイメージ図の中で、教育・幼少期からというところにフォーカスして計画を立てていくというお話があったが、この人物像の中に小中学生が入っていないので、やはり子供の声や感覚といったものを踏襲するとか、この中に浸透させていく必要があると思う。その辺りのご検討をお願いできたらと思った。

事務局 我々も現状として学校連携を強く進めているところである。児童・生徒、多世代の連携を深めていきたい。

植田委員 1点気づいたところがあり、資料2の考え方の流れの中で1個抜けているように思えて、先ほど事務局が説明された「毎回立ち換える」というものとして、「第5章」の位置づけが不可欠であると思う。第5章には今後の将来像や目標といったところが

入ってくるので、まず大事なキャッチコピーとしては方向性を示しつつも、第5章でしっかり定められて、その第5章の部分と6章7章がちゃんと一致していくというところを繰り返し見るというのが大事な視点と思う。その位置づけがしっかりとしてくれば、第3章の「歴史文化の特性」についても守っていかうという意識づけが可能になると思う。

事務局 第5章には総合計画の文言が入り、そこから導き出されるものとして方針での記載項目に反映させていく。6章の方針とも接続すると思う。

植田委員 総合計画の文言だけではなくて、おそらくそれを経た上でどうこの文化財を保存活用していくのかという方向づけのビジョンもしっかり設定されていくということではないのか。

事務局 然り。

森屋委員 都留市ならではのつながりの事例として、これから未指定のものも拾っていくと思うが、無形民俗文化財のところでお祭りや神楽だけでなく、地域のつながりを示す活動として「月待講」など「講」なんかも入れていくのがいいのかなと思う。

事務局 人が集まる場を紹介することで繋がりもイメージしやすくなると思うので、記載していきたい。

御山委員 会議資料4のステークホルダーのイメージ図だが、行政ができることはいいとして、その上の気持ちに対して、行政がどのような働きかけをするのかという位置づけをしていくのが大事なかなと思う。マンパワーや予算の問題がある中で継続的に進めることができるかを想定すると全部が全部やることは難しいため、行政としてどういうマネジメントができるのかというイメージを設定しておくのが大事だと思う。

事務局 ご指摘いただいた内容、行政支援の部分として継続的な部分とそうでない部分があるため、そういったところも整理しつつ、どうアプローチしていくかを再度検討していきたい。

田開委員 序章のところで、未指定文化財がなかなか登録されていないとか認知度の問題提起よりも、都留市のもつ特性や地域に資する財として守るべきものは何かということを最初書いて、単に計画付けて終わりではなく、ある意味パラレルに具体的に行動を起こしていくということを最初に言ったほうが、魂のこもった計画になるのかなと思う

た。2 段落目の本学に関係するところで社会教育の素地があるを書いてもらってありがたいが、一足飛びに関係人口に至っていないと断定するのはどうか。下地が不十分なところもあるが、現在行われている社会教育の様々な現場に、まずは大学生が出かけるといったことを念頭に置いて、課題感を再設定していただきたいと思う。市民の方を主眼に置いた現状課題を書いていく必要があると思う。

事務局 課題感にフォーカスしすぎた部分があるため、計画を読む方に寄り添い、前向きに文化財を盛り上げていくところをお示しできればと思う。

菊地委員 資料 2 で行政ができることと書いてあるが、これは行政だけでなく地域の計画であり、措置はいろいろなステークホルダーを包括して考えていく必要があると思うが。

事務局 行政だけを取り上げたということではなく、地域計画というのは行政の計画でありつつ地域の計画でもあるので、学校や大学、民間事業者などいろんなステークホルダーができることをトータルで考えていく必要があると思うが、たまたまこの資料ではここが行政だけが上がっているというイメージである。

菊地委員 今後進めていくアクションというイメージか。

事務局 然り。

小林議長 本来ならもっとご意見を伺いたいところだが、時間の都合もあるため、この辺で協議の方につきましては終結とさせていただきたいがいかがか。

（全体異議なし）

ウ 「その他」

事務局 改めまして、本日いただいたご意見も含めまして、この地域計画につきましてはブラッシュアップしながら調整を進めていければと思っている。スケジュール感としてお示ししている通り、あと 1 回今年度中に会議を予定しており、それまでにはいただいたご意見も踏まえてブラッシュアップした内容に積み上げられればと思う。次回の会議につきましては 12 月以降になる予定ですので、また改めてご案内させていただく。

佐藤委員 「宝地域健康ウォーキング」の開催背景について申し上げる。地域の健康づくりのイベントとして、先ほど冒頭にも話題に上がった近ヶ坂往還、いわゆる郡内から国中へ通じる絹の道を巡るウォーキングを従来より実施していた。しかしながら、正直に申し上げて、現在は各地でクマの出没被害等が散見される状況にある。有志によるハイ

キング道の整備は年2回ほど行っているものの、不特定多数の方々、特にお子様や女性を引率して実施するには安全面での懸念があり、昨年度は警察官に同行していただいたという経緯もある。こうした中で地域のイベントのあり方を模索する契機となったのが、先般実施された地域文化財の悉皆調査である。その結果を踏まえ、まずは地域の住民に、普段の日常生活ではなかなか触れることのない身近な隠れた文化財がどのようなものであるかを知っていただくことが第一であると考えている。

もう一つの大きな背景として、近年、自治会組織の脆弱化や崩壊が進んでおり、それに伴い神社の氏子組織が解散してメンテナンスができなくなったり、お寺においても住職が不在となり堂守の方が管理せざるを得ない状況が生じている。少子化のみならず、古来からの地域組織が崩壊しつつある中で、どのように文化財を保存・管理していくのかという点は、私たちも大きな課題として強く認識しているところである。

一方で、文化財の価値を一般の方々に周知するにあたり、文章やビジュアルによる告知だけでは、実際に体験していただかないとなかなか実感が湧きにくいという課題もある。そこで、現在のありのままの状態、神社だけでなく周辺の石造物文化財も含めてハイキングを兼ねながら巡り、全長6キロメートル弱のコースをご案内するイベントを新たに企画した。

今回は初回という位置づけであり、今後に向けた長期的な計画として、宝地域を4つに分割し、4年がかりで全区間をコンプリートしていく構想を抱いている。

本日の会議でも議論になった「歴史的背景と現在の紐づけ」という観点から述べると、冒頭に挙げた近ヶ坂往還においても、江戸時代に私の住む地域は水田が少なく年貢米の納付が困難であったため、その代わりとして道路の整備・普請における使役を年貢の代わりに拠出してきた歴史がある。したがって、近ヶ坂往還の本体だけでなく、そこから枝分かれして尾形資料館方面へ通じる中谷地域への道なども含めて整備されてきた経緯がある。

本来であればそうした歴史的な道中すべてをご案内できれば理想的であるが、その山道には行き倒れになった方を弔う石造物などが数多く存在しており、安全面等から現状では十分に紹介しきれない部分もある。そのため、まずは手近なところから、神社仏閣や路傍にたたずむ道祖神などを地域の皆様に知っていただき、今後自分たちがどのようにそれらを保全・管理していけばよいのかという問題提起や定義づけを兼ねてこの企画を立ち上げた。

詳細については、今後「都留の広報」の協働通信等でもご案内する予定であるので、委員の皆様におかれましては、ぜひお気づきの点やご関心がございましたらご参加いただければ幸いである。

